

The Voice of Mission



路上でムスリムの子どもに福音を語る伝道者、キルギスタンの首都ビシュケクで

キリストこそ私たちの平和

"実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。"

エペソ人への手紙 2章 14-15節

イースターを心から賛美します。
全世界で御子イエス・キリストの復活が記念されますように。

私たちの世界には、残念ながら様々な「対立」と「分裂」があります。大きなものでは国家間の対立や紛争があり、職場や家庭でも対立が生じます。そして、自分自身の心の内でも葛藤が起こり苦しむことがあります。これらは「平和」と真反対です。

少し考えてみれば、「対立」と「分裂」問題の根には、「自分は正しい」という思いがあります。これが他を支配しようとして、また赦さず裁こうとするのです。他人を赦すことができず苦しみます。それは、「自分の正しさ」に縛られているからではないでしょうか。キリストの十字架は、人間の心に植え付けられた「自分の正しさ」という罪の根を断ち切るものであったはずです。しかし、いつの間にか「自分の正しさ」という鎖にからまれているのではないのでしょうか。解決は、神の御前にひれ伏すことです。

ミッション・宣教の声 主幹
黒田 禎一郎



ところで、世界が「対立」と「混乱」の渦中に巻き込まれている今、私たちには何が求められているのでしょうか。それは「自分の正しさ」(束縛)からの解放です。自分の思いの正しさ、生き方の正しさ、主義主張の正しさ、教理や教義の正しさ…。自分がかかわる正しさの全てから、私たちが解放されることです。それは完全なお方(神)の前に立つ時に、実現可能となります。

罪のないイエス・キリストが、その正しさの全てを捨て、十字架にかかり、罪の贖いのみわざを全うしてくださいました。そして三日目に死を打ちやぶって、復活されました。私たちも流された血潮を受ける時、「自分の正しさ」の鎖から解放されます。これから困難な時代が、やって来ようとしています。その中で切に願うことは、キリストの御血によって救われた者たちが、「自分の正しさ」から解放され、イエス・キリストの平和のみわざを受け継ぐ者となることです。「キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし…」
今年の復活祭こそ、平和でありますように。

ジャパニーズ・クリスチャン・フェローシップ・ネットワーク (JCFN) の働きは、「海外から日本にクリスチャンとして帰国する方々が、世界宣教のために整えられること」を目的として、さまざまな活動を行っています。その働きは、日本人宣教に携わる海外の教会や諸団体、そして(当然ながら)日本にある教会や諸団体と協力しながら進めています。そのため、JCFNではネットワークを築き、パートナーシップをとっても大切にしています。

パートナーシップ

例えば、アメリカのインターバーシティ(キリスト者学生会と同じネットワーク)、国際ナビゲーターズ、キャンパス・クルセードなどの大学生伝道団体には、留学生部門があります。また、留学生伝道に特化したISIやIFIなどもあります。さらに、現地の教会が留学生の家族や移民を対象にESL(英語クラス)を提供しており、そこに日本人の駐在員家族が多く集まっているケースもあります。



キャンプ参加者の青年たち

これらのミニストリーから、私たちは多くのことを学ぶことができます。彼らの福音の種まきに対する寛大さ、粘り強さ、そして忍耐です。同時に、その働きは非常に戦略的で、神の御国建設に仕える尊い働きだと言えるでしょう。

留学生や駐在員家族は、いずれそれぞれの国に帰国します。つまり、彼らは現地の働きに継続的に関わることのできない人たちです。それでも、これらのミニストリーは愛と労力を惜しまず注ぎ続けます。異国の地で助けを必要としている人々に、具体的な支援を提供するのです。空港への送迎、家具の調達、運転免許の取得や銀行口座の開設など、時間をかけ、実際に出向いて手助けをしています。

その人たち全員が、すぐに求道者になるわけではありません。しかし、愛をもって丁寧に支え、仕え続けるのです。そのような関わりの中で友情が生まれ、イエス様の愛が伝えられていきます。海外で救われる方々の多くは、見返りを求めないクリスチャンの愛に圧倒され、心を動かされ、「この愛は、一体どこから来ているのだろうか」と問い始めます。親切を超えた愛の行為は、イエス様の愛を具体的に表すものです。こうした経験を通して、彼らは自分の中にあつた宗教に対する前提や固定観念を覆され、聖書を学ぶ中で、イエス様の愛を少しずつ理解していくのです。

帰国者ミニストリー

その中でイエス様に出会った人たちも、やはりやがて帰国していきます。つまり、留学生伝道に携わる人たちは、送り出すことを前提に、それでも限られた時間の中で愛をもって

イエス様を伝えるのです。そして大切な友人たちを、イエス様の導きに信頼しつつ、帰国先の母国にいるクリスチャンへと委ねていきます。その橋渡しの役割を、JCFNは担わせていただいているのです。

ミシガン州など自動車産業の盛んなアメリカ中西部では、多くの駐在員とその家族が3~5年の間滞在しています。デトロイト郊外にある現地教会では英語クラスを提供していますが、約200名の参加者のうち96%が日本人で、まだイエス様を知らない方々です。彼らは英語を学ぶ中で聖書の話を読み、バイブルスタディを始める人たちも起こされています。これらのミニストリーは、主に種まきを目的とした働きです。救われる方の割合は決して多くないかもしれません。しかし、これまで教会に足を運んだことのない多くの家族が、クリスチャンの具体的な愛の表現に触れ、心が耕されています。どれほど多くの人々が、初めて聖書の話を読み、イエス様に触られた経験をもって帰国していることでしょうか。

帰国者のフォロー

また、海外で救われた方々は、多くの場合、家族の中での初穂、最初のクリスチャンです。彼らは帰国後、家族や友人、職場の同僚や学校の友人、さらには近所の人々に対して証人となり、福音を分かち合っていきます。たとえ救いの決心に至らなかったとしても、海外でクリスチャンから親切にされ、愛された経験を通して、彼らの人生は深く触れられているのです。

JCFNでは、そのような人たちの帰国先において、彼らを受け入れてくれるクリスチャンや教会を探し、信仰が継続して成長していくように、また、すでに福音の種が蒔かれた心に、引き続き水を注ぐことができるようにつなげていくことを大切にしています。自動車産業関係で駐在している方々は、会社所在地のある地域に帰国されます。そのため、特に祈りつつ力を入れたいと思っているのは、帰国された場所にある教会とのネットワークをさらに深め、強めていくことです。

この記事を読まれている皆様と、皆様の集われている教会が、海外の教会で行われている種まきの働きの「続きを担う存在」として、共にこの働きに携わってくださっていることを、心より感謝しています。(つづく)

伝道、プレゼントにもおすすめです。

聖書の集い・連続メッセージ
「讃美歌詩・聖歌詩の背景から学ぶ信仰」

その時、わがたましいは歌う

主幹 黒田 禎一郎

多くの人たちに親しまれている讃美歌詩・聖歌詩の背景にある作詞者の信仰に焦点をあてる励ましのメッセージ集です。

第1巻～第10巻 刊行 中綴じB6サイズ ¥500(税別)

ご注文は「ミッション・宣教の声」事務局まで。

前号に続き、現地の主の働き人からのレポートです。

私たちのミニストリー

私たちは毎年、6月中旬から8月末まで、「子どもバイブル・キャンプ」に力を注いでいます。キャンプに参加した子どもたちが、イエス・キリストを救い主と信じる決心が起こされて感謝しています。キャンプ開催地は、主にアクセス困難な山岳地帯の遠い場所を選びます。そうすることで、当局が私たちを見つけるには時間を要します。秘密警察が3日後に到着する頃には、私たちはすでに別の場所に移動しているのです。神は険しい地形や悪路を備えてくださり、感謝しています。これまでに多数の子どもたちがキリストの福音を聞き、回心し洗礼を受けました。この数年間で救われた子どもたちが、今でスタッフとして私たちと共に奉仕しています。それは、私たちにとって大きな喜びです。



心温く人へ個人伝道

私たちは年に2回、洗礼式を行っています。受洗者の中には非常に多くの現地のタジク人はじめ、ウズベク人がいます。彼らは神の生けるみことばを聞き、信じて自らの人生をイエス・キリストにお委ねしました。そして、彼らは家族のもとに戻り、神のみことばを宣べ伝え続けています。私たちは、アフガニスタン難民に対しても伝道しています。まず何よりも人道支援を優先しています。一例を上げれば、彼らに必要な食料パッケージ等を供給して支援しています。友情を築くと、彼らはしばしば私たちにこう尋ねてきます。「あなたたちはいったい誰で、なぜ私たちを助けてくれるのですか?」と。すると、私たちは、「私たちはクリスチャンであり、主イエス・キリストの御名によって行動しています。神はあなたを愛しておられ、あなたが救われることを——そしてあなたが福音をあなたの家族に、あなたの言語で伝えることを望んでおられます。」と答えるのです。

アフガニスタンとタジキスタンでの奉仕

つい最近ですが、当局がアフガニスタン難民に本国へ強制送還し始めました。あるクリスチャン家族は自発的にアフガニスタンに戻りましたが、そこで命の危険にさらされていると報告が入りました。なぜなら、現地ではクリスチャンであることが分かれば、現在のタリバン政権下では命を失う可能性が非常に高いからです。私たちは、主イエスが彼らを守り、彼らがその地で福音の光となれるように祈っています。タジキスタンにいるアフガン人の間でも、徐々に宣教の実りが見え始めてきました。あるアフガン人は自分たちの血統は、イスラム教最高指導者預言者ムハマンドにまで遡ると語っていました。しかしある時、彼らはキリストの福音に接し回心し、今では私たちと共に主イエス・キリストに仕えています。

「子ども・女性センター」

タジキスタンでは、子どもたちは社会で最も弱い立場にあります。特別な保護が必要なケースが多くあります。多くの親が出稼ぎ労働者として海外に渡るため、子どもたちを無防備のまま、そして教育も監督者もない状態で置き去りにしています。その結果、子どもたちが犯罪に巻き込まれてしまいます。そこで、私たちは「子ども・女性センター」を開設し、彼らの生活支援、教育、住まいの確保等に取り組んでいます。また、困窮する子どもたちへの食事の提供も、定期的に行っています。



玄関先に届いた救援物資

ある国立児童養護施設は、都会から60キロメートルも離れています。そこには、身分証明書や書類を一切持たない子どもたち(11~13歳)が暮らしています。私たちは西側の兄弟姉妹の支援により、ある建物を取得し、ホームレスの女性や子どもたちを受け入れる施設を建て上げました。そこには、文字通り路上で生まれた子もいます。私たちは彼らを受け入れ、彼らの生活を支え、必要な書類の取得等の手助け等を行っています。

ホームレス

女性や子どもたちには、かつては家がありました。しかしイスラム法では、「離婚」という言葉を三回唱えるだけで、簡単に婚姻は解消されます。ですから夫たちは妻を簡単に家から追い出し、身分証明書を取り上げることができるのです。突然、母親たちは子どもたちを抱えて無一文となり、路頭で迷うことになります。残念ながら、これは非常に広く行われている慣行です。また、多くの女性や子どもたちが、火災によってホームレスになっています。



交わりのひと時

1990年代に発生した内戦の影響で、経済は国民に非常に深刻な打撃を与えました。残念ながら、国家は社会の最も弱い立場の人々を支えることができていません。そこで神は私たちクリスチャンを用いて、彼らに必要な支援と援助を提供しておられるのです。私たちは、弱い立場にある人々の世話をし、彼らに福音を分かち合うことを使命としています。特に子どもたちへの奉仕は、私たちスタッフの心に深く根付いています。

例えば、道端でビーチサンダルを履いて学校に通う子どもを見かけると、その子に靴を一定買ってあげます。学校では制服の着用が義務付けられておりますが、貧困が増す中で、自分の子どもたちに必要なものを揃えてあげられない親もいます。私たちはそうした家庭に食料を提供し、制服の購入を支援することで、子どもたちが学校に通うチャンスを得て、いつか聖書を読めるようになることを目指しています。(つづく)

「たとえ明日、世界が滅亡しようとも、
今日私は林檎の木を植えるだろうー」

マルティン・ルターの名言は、何世紀にも渡り、今日も励ましと希望を人々に与え続けています。どのような状況に置かれようとも、たとえ明日のことは分からなくても、全能者なる神だけを見上げ、自分に与えられたこと、今できることを精一杯やるという決意と行動の大切さを教えてください。ここに、主の旅人として、荒野の道を歩き始めた、脱北者たちの共同体があります。彼らには明日が見えなくても、それぞれが神から受けた恵みを握り締め、彼らの使命と希望の象徴である「林檎の木」を、今日も彼らは何処かで植えています。今月号は、2023年12月号「光あれ」で掲載した、脱北者教会のその後のストーリーをお届けします。

新しい息吹のはじまり

神が脱北者たちに与えられた召命は、彼ら全員がもはや難民ではなく、神に選ばれたディアスポラとして生きる道でした。脱北者のコミュニティから成るこの共同体に、神はさらなる新しい挑戦をお与えになりました。これまでの韓国教会や宣教団体に依存してきた北朝鮮宣教から脱却し、自らの手で、祖国に残してきた家族や同胞たちを救済せよと神は彼らに語られました。彼ら自身が経済的に、そして霊的に、自立することを目指し、教会の開拓へと導かれました。彼らは土地や建物を探し、ソウル郊外で廃墟となった障害者施設を見つけました。彼らはこの土地の名義人に全ての資産を渡し、何も持たないままこの地に移り住み、教会員たちは自分たちで荒れ果てた建物内部をリフォームしました。信仰と生活が一つになる拠点として、開拓された「新しい息吹教会」が誕生し、教会員たちはそれぞれの賜物を用いて、そこで事業も立ち上げました。自然農園、北朝鮮料理レストラン、ヒーリングセンターを開店させても、働いている教会員たち全員が何よりもまず、神との関係を重きに置くようにと、働き方に工夫を凝らしました。彼らの1日は祈りと御言葉で朝が始まり、日中はそれぞれが置かれた場所で働き、夕方は礼拝で締めくくりました。日曜日は近隣住民や南北の聖徒たち、あらゆる人々のための主日礼拝と子ども礼拝が行われました。教会内ではもちろん、些細な問題は様々ありましたが、彼らは互いの愛と赦しと信仰によって乗り越え、まさしく使徒行伝2:44～47の御言葉を体現したかのような教会へと成長しました。

眩い光に包まれながら

事業も軌道に乗り、教会員たちに変化が見られました。これまでは人々から与えられ、受けるだけであった彼らが、イエス・キリストの弟子として、人々と神のために喜びを持って仕え、受ける人から与える人へと変えられていきました。また、彼らは祖国北朝鮮を越えて、中国やロシア、中東を経て地の果てまでビジョンを抱くようになりました。実際に彼らはイスラエルや中東の国々を訪れ、その国の人々を知り、仕え、彼らのために祈り、またそれらの地の宣教師たちを手伝いました。彼らの内にある聖霊の炎は、自国北朝鮮だけでなく、彼らが出会ったことのない民族や国々まで祈りが及びました。

これまで自分自身の生活だけで精一杯であった、教会員たちの狭かった目線は、いつしか遠い世界にまで目が開かれるようになりました。この3年間、多くのたましいがイエス様と出会い、家庭が回復し、癒しを経験し、10人の新しいのちが産声を上げました。事業を通して与えられた祝福も、資金とともに救いの良き知らせを定期的に故郷に届けることもできました。このように「新しい息吹教会」は、眩い光に包まれながら前進していくことを、誰もが信じて疑いませんでした。

私たちが植える林檎の木

全てが順調に見えたこの教会にも悩みの種があり、やがて大きくなったその種は、この共同体を追い詰めていきました。この教会の土地の売買契約書を誤って締結してしまったことが発端となり、教会側が契約金など全て支払い、購入したはずの土地にも関わらず、土地の持主と争う姿勢となりました。結局、相手側の訴訟により教会は第一審で敗訴しました。この法的闘争は、社会主義を背景に持つ彼らにとって個人の責任を自覚するきっかけを与えてくれ、民主主義による法治を学ぶ時となりました。第1回公判前、教会は「悔い改めと感謝」をテーマに、神様がこの3年間して下さったことへの感謝を掘り起こす時間を持ちました。もし、彼らに経験や法の知識があったなら、きっと教会を始めることはできず、ここで与えられた恵みの多くは決して受け取れなかったことに気付きたが神への感謝が溢れました。先日、彼らは裁判所の通知により、土地の立ち退きを命じられました。彼らは控訴し、一旦は執行停止通知を受けましたが、結局、自分たちの主張を手放し、全てを神の御手に委ねることにしました。「新しい息吹教会」は全てを引き払い、礼拝堂を空にし、事業は全て廃業手続きをしました。寒いこの冬に彼らは家を追われ、荷物を整理することは容易ではありませんでした。しかし、かつて北朝鮮で食べ物がない中で、かろうじて生き残り、また裸同然で必死に祖国から脱出した日々と比べると、この状況は彼らにとっては贅沢にさえ感じました。もはや教会堂はありませんが、彼ら一人ひとりが教会であり、彼らが今、立っているこの場所こそ、礼拝すべき聖なる場です。荒野の道を選んだ彼らが植える「林檎の木」とは、主を礼拝するために生き、ディアスポラとして全ての造られた者に主の救いを告げ知らせる—それは、私たち全てのキリスト者も同じではないでしょうか。



ですから、私の愛する兄弟たちよ。強く立って、
動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。
あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでない
ことを知っているのですから。(1コリント15:58)

(名前は全て仮名)(つづく)

World View

ドイツ

キリスト教西洋文明の信仰の基盤である「ノアの箱舟」を、可視化してみようという大規模なテーマパークを建設しようとしています。背後にある団体「キリスト教文化公園」の会長ラルフ・キーファー氏は、福音自由教会の神学者で聖書教師のロタール・ガスマン師の支援を受けて、2023年からこのプロジェクトを推進しています。計画されている場所は、ブラウンシュヴァイヒとマクデブルクの間のA2高速道路沿いに位置します。この高速道路だけで、発起人たちの計算によると年間約4000万件の視認接触が見込まれるという。このコンセプトはまさにそこに焦点を当てています。好奇心を呼び起こし、「通りがかりの」人々を引き付けることにあります。具体的な土地購入はまだ行われていませんが、所有者からの書面による意向書は出ており、約9ヘクタールの土地を長期間の借地契約が予定されています。

公園の中心には、聖書の寸法に基づいた歩行可能な「ノアの箱舟」が造られる予定です。しかし、米国ケンタッキー州の箱舟の複製とは異なります。中の展示物は創造だけに焦点を当てたものではありません。「聖書66巻のすべてを表現可能な限り、その内容を提示することにあります。私たちは聖書の世界を『歩いて体験できる』ようにすることができます」とキーファー氏は語っています。会場には、2つの相互に連結した展示エリアが計画されています。一つは、創造からイエス・キリストを経てヨハネ黙示録に至る、「赤い糸」を持つ聖書展示です。二つ目は、聖書の創造論に対する自然科学的証拠を提示する科学展示です。そこは、聖書の価値観、歴史、社会に与えた影響を表す文化展示会場となります。宗派的な特殊教義や教会政治的な議論ではなく、「聖書に書かれていること」に集中したいと強調しています。目標は、献身的なキリスト教徒の間で可能な限り広範なコンセンサスを得ることです。

展示はまた、救い主としてのイエス・キリストを指し示すものともなります。また、自由にアクセスできる緑地で憩いの場所を備えた「出会いの公園」も設ける予定です。さらに、1階には講演会、パネルディスカッション、特別展示のためのスペースも用意されます。費用はかなり高額で、現在の見積もりでは約2400万ユーロ（約44億4千万円）となります。発起人たちは、献金、キリスト教企業家からの寄付、段階的な実施によってプロジェクトに資金を満たす予定です。彼らはクラウドファンディングも検討しています。団体によると、すでに最初の意向書は存在しているそうです。しかし、舟の建設を開始する前に1200万ユーロに達する必要があります。建設がいつ始まるかは、建築許可と建築計画の策定に関係しますが、早くても2027年です。支援者には、



公園内のノアの箱舟、建築予想図

これまでのところ元ZDFキャスターのペーター・ハーネ氏、ブラウンシュヴァイクの連邦物理工学研究所の元所長ヴェルナー・ギット教授、分子生物学者のペーター・ボルガー氏などが含まれています。

ウクライナ

2月24日、ロシアによるウクライナ全土への残虐な侵襲から4年が経ちました。国際法違反のクリミア併合以来、戦争は既に12年に及んでいます。そして、長期間にわたる出来事にはよくあることですが、それは日常となり、背景に追いやられていきます。ウクライナもまさにそうになっています。報道や社会的関心は薄れてきました。2022年には「ウクライナ」という言葉は、Googleのヘッドライン欄で検索ワード第1位でした。しかし2025年にはトップ10にすら入らなくなりました。



戦士した兵士たちの墓地

〈深刻な影響を受けている子どもたち〉

苦しみ大きさを改めて意識に呼び戻すために、個人的な体験談だけでなく、数字も役立ちます。援助団体「ワールド・ビジョン」の発表によれば、戦争開始以来、ウクライナの子どもの5人に1人が身近な人を失っています。特に前線沿いでは、子どもたちは暖房のない地下室やシェルターで何千時間も過ごしてきました。彼らは防空壕の中で育ち、そこで学び、遊ばなければなりません。可能な子どもは、心理的ケアを受けています。「ワールド・ビジョン」のウクライナ支援プログラム責任者アルマン・グリゴリヤン氏によれば、精神的な傷は増大しており、「社会に長く影響を与え続けるだろう」とのことです。



心理学者のケアを受ける子どもたち

〈1500万人がトラウマを抱える〉

約1500万人が、戦争によってトラウマを受けたと言われます。数十万人の兵士が戦死し、数十万人の市民が氷点下の気温の中、何週間も安定した電力や水の供給もなく、暖房もない状態で生活しています。ロシアが意図的に民間インフラを破壊しているためです——これは国際法で禁じられている行為です。

〈人々を打ち砕く〉

ロシアは人々を打ち砕くために、寒さと破壊を意図的に武器として使用していると、ディアコニー災害援助機構の責任者マルティン・ケスラー氏は語ります。戦争の終結は依然として見通せず、和平締結をめぐる議論は続いています。そしてそれとともに、民間人の苦しみも続いています。数多くのキリスト教支援団体が現地で活動しており、寄付によって支援が続いています。どうぞ、祈り覚えてください。

ナイジェリア

カドゥナ州クルミン・ワリで、拉致されたキリスト教徒少なくとも163人が解放されました。1月18日、武装集団は二つの礼拝から彼らを連れ去っていました。報道によると、複数の政府機関による合同作戦によって解放が実現しました。ナイジェリア・キリスト教協会(CAN)のジョセフ・ハヤブ牧師は、カドゥナ州知事ウバ・サニの尽力に感謝の意を表しました。さらに、キリスト教徒が多く住むベヌエ州イェルワタでの虐殺事件に関連して、9人の首謀者とされる人物がテロリズムの罪で起訴されました。支援団体「オープン・ドアーズ」は、この裁判を重要な前例と評しています。ナイジェリアは、キリスト教徒への迫害が最も激しい国を示す世界迫害指数で第7位に位置しています。人口約2億3000万人のうち、キリスト教徒とイスラム教徒がそれぞれ約46%を占めています。長年続くこの国の混乱のために、お祈りを願います。

World View

ワールド・ビュー

イラン

イランでは2025年、宗教的信念や活動を理由に逮捕されたキリスト教徒の数が、前年のほぼ2倍に達しました(139人に対し254人)。これは、オープン・ドアーズ、Article18、CSW(クリスチャン・ソリダリティ・ワールドワイド)、および「ミドル・イースト・コンサーン」の4つのキリスト教支援団体による共同年次報告書で明らかになりました。報告によると、禁固刑、追放、または強制労働に服したキリスト教徒の人数も、2024年の2倍以上に上り(25人に対し57人)ました。さらに、より厳しい刑罰への傾向が見られ、少なくとも11人のキリスト教徒が10年以上の禁固刑を言い渡されました。イランの裁判所が、2024年にキリスト教徒に対して科した禁固刑の合計は263件であったのに対し、2025年には合計280年に達しました。

ここまで筆者(黒田)が原稿を書いていたところ(2月28日)、米国・イスラエルがイランに集中攻撃を始めた報道が流れました。理由はイランの核開発阻止です。しかもこの大規模作戦によって、イラン最高指導者ハメネイ師は殺害されました。イランはこれに反戦しています。今後、戦火は簡単には消えることはなく、中東全体、また日本と世界に少なから影響がくるものと考えられます。イランにも教会はあり、クリスチャンもいます。どうぞ、この戦争と現地の方々のためにお祈りをお願いします。



トルコ・イスタンブール

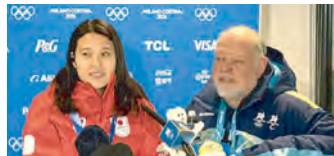
トルコ

トルコ政府は、キリスト教宣教師を意図的に国外追放しているとの非難を否定しました。トルコ外務省は声明の中で、トルコによるキリスト教徒の不法な国外退去を非難する欧州議会の決議に反論しました。声明では、いかなる外国の機関もトルコの司法手続きに干渉する権利はないとしています。しかしEU議会は、欧州人権裁判所の決定に対応したものです。トルコも承認している同裁判所は、現在、外国人キリスト教徒に対する入国と滞在禁止の20件を審査中です。これに関連して、同裁判所はトルコ政府に見解の提出を求めています。人権団体ADFインターナショナルによれば、入国・滞在禁止の理由は、トルコにおける信仰を公言するキリスト教徒の

活動があると言います。同団体は対象者の一部を代理していますが、影響を受けた人々は主に外国人プロテスタント宣教師です。トルコ内部の安全保障コードに基づいて、国家安全保障上の脅威と分類されたようです。その結果、彼らとその家族は出国を余儀なくされたり、海外渡航後の再入国を拒否されたりしました。お祈りください。

イタリア

「ミラノ・コルティナ2026冬季オリンピック」で、ボランティアで活躍した元ドイツ人宣教師がいました。彼の名前はマルクス・ナイツェル師で、通訳兼ヘルパーとして活躍しました。彼の業務は、日本チームの付き添い(組織的な事務からドーピング検査や医師の診察時の通訳まで)が含まれました。ナイツェル氏はオリンピック村に駐在し、二階堂蓮選手や小林陵侑選手など、男子ペアチームスプリングの優勝候補に数えられる選手たちの通訳を務めました。また、銅メダリストの丸山希選手の記者会見でも通訳を担当しました。



銀メダリスト丸山希選手の記者会見を通訳するナイツェル師

ナイツェル師は今回、多くの選手と親密な関係を築き、感動的な瞬間を間近で体験しました。2月14日にラージヒルで銀メダルを獲得した二階堂蓮選手のそばにいた時、二階堂選手は喜ぶのではなく、金メダルを逃したために「涙にくれていた」と言いました。彼は選手たちに聖書カレンダーやキリスト教漫画などのプレゼントを贈呈し、オリンピック村のチャペルに聖書を置いていました。選手たちは彼が牧師であることを知っており、「励ましを感謝して受け入れている」とのことです。特に競技後、緊張が解けた時に個人的な会話が生まれることが多かったと、ナイツェル師は語ります。一部の選手にとって、彼は父親や祖父のような存在であったそうです。

ナイツェル師は2013年から、定期的にスキージャンプ・ワールドカップでボランティア通訳として活動しています。オリンピックへの参加は今回が初めてでした。彼はOMFドイツ宣教団に所属し、1987年から2000年まで妻コニーさんと共に日本で宣教師として働きました。日本のクリスチャンと共に、5つの教会を設立しました。OMFインターナショナルは、1865年にイギリス人医師ハドソン・テラー(1832-1905)によって中国奥地伝道団として設立された団体です。現在、40カ国から2,100人のスタッフが東アジアの約100の民族グループで活動しています。OMFドイツは福音主義宣教師協議会(AEM)に所属しています。

編集後記

- 主イエス・キリストの復活に感謝します。あの大雪の冬も過ぎ、今では春を迎えました。皆様はいかがお過ごしでしょうか。今月も機関誌をお届けできる幸いに感謝します。
- 前号から北米の邦人宣教レポートが始まりました。現地在住の日本語を話す方々に、さまざまな形でキリストの福音が宣べ伝えられています。スタートを切ってくださったJCFNの北米代表清水摂主事に感謝します。
- 旧東欧コーナーでは、ムスリムが多い中央アジアからの宣教レポートをお伝えしています。経済的、信仰的に大変困難な地でキリストの福音は宣べ伝えられています。どうぞ、彼らを祈り覚えてください。 平安。



The VOICE of MISSION ミッション・宣教の声
The Voice of Mission

発行人 黒田禎一郎
年間購読料 ¥2,500(送料込)
1981年12月初版発行(毎月1回1日発行)

〒541-0041 大阪市中央区北浜2-3-10 VIP 関西センター 5F
TEL 06-6226-1334 FAX 06-6226-1336
E-mail senkyo@vomj.jp URL http://vomj.jp/

The Voice of Mission
MUFU Bank, Ltd. Sakaihigashi Branch
Bank account No.3623132 SWIFT CODE : BOTKJPJT



■郵便振替口座 00940-3-301623
■銀行口座 三菱UFJ銀行 堺東支店(店番205)
普通口座 3623132 「ミッション宣教の声」

Bank Address : 59-2 Mikunigaoka-Miyukidoori, Sakai-ku,
Sakai-shi, Osaka-fu 590-0028 JAPAN TEL:81-72-221-3041